

# ベトナム・ホーチミン駐在日記

## 2021夏〜2022新春

### ——コロナ下における隔離体験記

ベトナム明専学友会 枝廣 哲志（機二60）



私は小型モーターや関連するユニットのメーカーである日本電産サンキョーでプレス金型の設計業務に従事しており、2018年4月からベトナム南部の都市ホーチミンにある海外現地法人に赴任しています。モーターなどの金属製部品を量産加工するプレス工場を管理運営しながら、ベトナム人スタッフにプレス金型の設計指導を行っています。工場はホーチミン市内のサイゴン・ハイテク・パークという工業団地内にあり、約4000人が働いています。プレス工場には約90人の従業員がおり、5日出勤して1日休日というシフトで昼夜2交代の操業をしており、

土曜・日曜日も生産を行っています。このような海外生活の中、新型コロナウイルス肺炎に関する特異な体験をしたので、皆様にお伝えしようと思ひ、この原稿を書いています。

昨年(2021年)4月頃までは、各国から「ベトナムはコロナ対策の優等生」と呼ばれていました。海外からの正規ルートや隣国からの密入国によりウイルスが持ち込まれたことはありますが、厳しい水際対策や早期のロックダウンで感染をベトナム国内に広げることなく収束させていました。

ベトナム入国には、他の諸外国と同様に出国でのPCR陰性証明書が必要です。ベトナムの空港に到着後は、防護服を着せられて指定のバスで隔離ホテルに移送されます。そこで2〜3週間隔離され、毎日朝夕の体温測定と数日おきのPCR検査があり、隔離期間終了までPCR検査が陰性なら証明書を受け取ってホ

テルから出ることができません。このような方法をとっているのが日本のように空港に到着後、行方が掴めなくなる人はいません。

感染が広がりはじめると、都市単位でロックダウンを行います。人の集まる大型商業施設や全ての食堂の営業停止（テイクアウトはOK）、タクシーを含む公共交通機関のSTOP、感染者が発生したエリアの封鎖や消毒などが行われます。政府の決定から実行までの時間が短く周知期間なしで実施するので、当日午後に連絡を受けて夕方から閉店とか、前夜アパートに帰宅できたのに翌朝



写真1：日本人街の一角にある路地が封鎖されました。(2021年6月)

には路地が封鎖されて閉じ込められた(写真1)というスピード感です。この中で私が最も効果的だと感じたのは公共交通機関の運行停止で、もしこれを日本でも採用できれば、感染者の増加ペースを大きく下げられたのではないかと思います。

しかしこのような対策をとってきたベトナムも、昨年4月以降以降、徐々に感染者が増加してきました。5月頃には勤務先周りで大勢の感染者が発生したこともあり、6月1日に工場の全員を対象にPCR検査を行いました(写真2)。ワクチン接種は日本より遅れて6月頃から始まったよう、私の勤務先では6月21日に日本から提供されたアストラゼネカ製ワクチンの1回目接種がありました。これについても連絡があった当日に実施という時間感覚で、接種するか否か迷う時間すら無いといった感じでした。しかしその後、工場内でも感染者が多数発生したため、市政府からの指示で6月29日には工場が封鎖され(写真3)、勤務中の人は工場から出られなくなり、夜勤で工場外にいた人は入構できないという状況になってしまいました。

そんな訳で何の準備もないまま工場内泊まり込み生活（写真4）が始まりました。工場からは製品の出荷梱包に使用する段ボール箱とアルミシートが提供されて、各自仮眠スペースを作り、食事は三食とも工場内の食堂から提供（写真5）されます。ベトナム人の中には家族から着替えや食糧、扇風機を差し入れてもらった人もいましたが、私は工場内の売

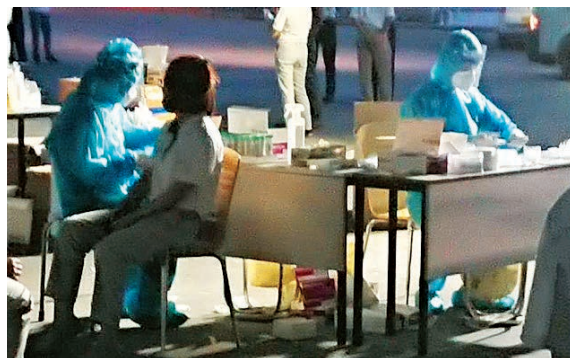


写真2：工場内で定期的実施するPCR検査の風景

写真3：勤務先が封鎖されたインターネットニュース記事（2021年7月）

店で歯ブラシとペットボトルの飲料水を購入し、社外の知人に頼んでタオルを差し入れてもらい、社内のATMで当面の現金を引き出して、いつまで封鎖が続くか皆目見当もつかない状況に備えました。翌日には会社総務が日本人の住むアパートの管理人さんに手配して着替えなどを届けてもらい、最低限の生活ができる環境が整いました。こんな感じで工場内に閉じ込められたまま生産活動を続けるという日々が始まりました。しかし工場全体で一斉に行ったP



写真4：当時の工場内の様子——暑いので屋外で寝ていた人も（2021年7月）

CR検査で大勢の感染者（F0と呼びます）がいることが判明し、彼らは病院へ移送。F0の濃厚接触者（F1）も数百人単位になったため、工場に隣接するグループ会社の空き社屋（工場・倉庫）を借りて、濃厚接触者はその間に移送隔離されました。そしてこの時点で工場の操業も停止となりました。私も濃厚接触者に認定されたため、7月3日にベトナム人と一緒に隣接する倉庫に移動しました。後で聞くと日本人はホテル隔離とする計画だったようですが、混乱の中、日本人1人だけベトナム人と



写真5：工場内の食堂で提供される昼食の一例

一緒に「難民キャンプ生活」が始まりました（写真6）。しかし濃厚接触者の「難民キャンプ」内でも感染が広がり、社内に残った人達の中からも新たな感染者が多数確認されたため、7月5日には日本人の濃厚接触者は政府指定の隔離ホテルへ、ベトナム人も隔離ホテルや指定の施設（大学の寮など）に移ることになりました。隔離施設では数日おきにPCR検査がありますが、それ以外は自室から外に出ることは許されません。ホテルなのでシャワー



写真6：濃厚接触者が隔離された「難民キャンプ」

もあり、クッションの利いたベッドに寝ることはできましたが、この隔離は精神的にかなりこたえました。

この隔離施設や、先の「難民キャンプ」内で感染したと思われる人も多数いました。日本人には1人1室が与えられましたが、ベトナム人は施設により2〜4人部屋での共同生活となったため、ここで感染が広がったと思います。また「難民キャンプ」でも私は唯一の日本人だったため、他の人と群れず距離を保っていました。ベトナム人従業員は遠足気分で共同生活をエンジョイしていた人も少なからずおり、そのあたりが感染するかしないかの分かれ目になったように思います。

なお社外に目を向けると、ホーチミン市は7月15日から全域でロックダウンに入りました。今回のロックダウンは以前より規制内容が厳しく、日用品の買い出し以外は外出禁止で、自家用車やバイクの運転にも通行許可証が必要でした。その監視のため、地域ごとに検問も行われたようです。ちなみにベトナムは社会主義国家で軍隊もあるため、ロックダウンを強行突破しようとする人はまずいませぬ。社外の知人に聞いた話では、自

宅でモヤシの栽培を始めたとか、故郷から野菜を大量に送ってもらったとか、日常とは異なる巣籠り生活を始めた人も多くいたようです。

私事ですが、長女の結婚式に出席するため、私は7月上旬から一時帰国する予定でした。しかし勤務先が封鎖され、帰国のためのPCR検査（指定書式の証明書が必要）や空港に行くことすらできない状況になったため、長女の結婚式にはやむなくONLINEで参加しました。その後9月下旬には次女が女の子を出産しました。私にとって初孫になりましたが、いまだ赤ちゃんに会えていないのが残念です。

さて私の勤務先では、7月下旬より本来の10分の1に当たる40人限定で、工場内に住み込む事を条件に操業が許可されました。私も濃厚接触者としての隔離期間を終えて7月31日に工場に戻りました。プレス工場では隔離後に感染者が多数発生したため早期に当社でできた人は僅かで、プレス機を運転できる技術員の出社が遅れたこともあり、最初は工場内の掃除ばかりしていました。その後

徐々に出社できる人も増えて、本来の10%程度の生産を継続していた中、8月18日に再び操業停止命令が出されました。

政府より許可された40人での操業許可を拡大解釈して、間接スタッフ・食堂や売店の従業員や警備員などを除外し、直接生産に従事する人のみカウントして40人としたことが行政機関にバレてしまい、そのため

2度目の操業停止となったのです。今回は工場の維持と操業再開の準備をする少数のメンバー以外は工場に残ることも許されなかったため、私は再びホテルに移って待機することになりました（写真7・8）。

私たちが6月下旬に接種したアストラゼネカ製ワクチンの接種間隔は3カ月以内です。2回目の接種はホーチミンの日本総領事館手配の施設で行うことになりました。ロックダウンの最中の9月8日に、通行許可証をつけた勤務先の車両で隔離先のホテルから軍の病院に行き、ワクチンを接種してもらいました（写真9）。



写真8

写真7：2度目のホテル待機中にベトナムの建国記念日がありました。ビルの壁面に赤いベトナム国旗が映されています（2021年9月2日）

写真8：ホテルの朝食——勤務先で手配した弁当が提供されます

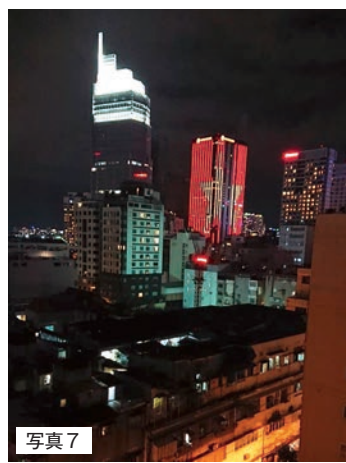


写真7



写真9：軍隊の病院で2回目のワクチン接種（2021年9月）

なおベトナムでは紙の接種証明書の他、スマートフォンアプリでも接種証明を表示できます。

そして3回目のブースター接種は日本よりもかなり遅れて開始され、私は今年（2022年）1月5日に勤務先で3回目の接種を受けました。

工場に残って行政機関と折衝を続けた幹部メンバーの尽力や、工場内に新たに設けた就寝スペースなどハード面の改善のおかげで、9月16日から工場の操業を再開することができ、私も9月19日に工場に戻りました。なお工場に入るには会社が確保したホテルで1週間待機してPCR検査を行い、陰性であることを確認してから工場に入るという方法で安全を確保して、工場内に感染を持ち込まないというやり方をとっています。

400名まで従業員を増やした後は、以前濃厚接触者を隔離した隣接する空き社屋に生活スペースを整備して1000人の操業許可をとり、その後も複数のホテルを1棟丸々借り上げて会社の一部とみなすという手法で許可を得て、徐々にコロナ前の生産体制に戻していきました。当時は

大型バス50台を貸し切って2000人以上の人が朝夕ホテルから通勤するという壮観な光景も見られました。3日に1回のペースでPCR簡易検査も継続しています。

プレス工場は復活のペースが速く、10月下旬からは夜勤の生産も開始しました。工場の2階にあるCAD室に居住していた私は夜勤時のプレス騒音で熟睡できないかと考えましたが、実際にはプレスの作業音が止まる方が心配で、順調に稼働している機械音を守歌に段ボールの上で横になっていました（写真10）。



写真10：私はCAD室の床に就寝スペースを作りました

10月にはホーチミン市のロックダウンも解除されて、街中は普段の生活を取り戻してきたようです。しかし私の勤務先は独自の規制を継続しており、工場から出られない生活が続きます。これは過去に2度も操業禁止命令を受けているので、これ以上社内で感染者を出して3度目の操業停止にする訳にはいかない、という強い意思によるものです。

しかし社内でも「感染者0ではなく感染者が発生しても広げない」という方針転換を行い、11月中旬から試験的に一部メンバーを自宅通勤に切り替えて感染状況を確認し、徐々に自宅通勤許可者を増やしていきました。その分感染リスクは高くなりますが、マスクに加えてフェイスシールド着用の徹底やパーティションによるエリア区分などで万一工場内にコロナウイルスが侵入しても感染が広がらないよう対策を行いました。

その結果、工場内で定期的に行うPCR簡易検査の結果は疑陽性者が毎回1%以下で、想定内の範囲に押さえ込んでいます。

私たち日本人赴任者も11月24日に、今まで住んでいたアパートに5カ月ぶりに帰ることができました。その夜に見たホーチミンの街の明かりや人通りは別世界のように思われました。しかしアパートに戻れたとはいえ全て規制が解除された訳ではなく、感染の危険がある外食は勤務先から禁止されたままで、不要の外出も避けています。そのため食事はコンビニなどで購入した食糧をアパートの自室で食べるという毎日が続きます。

私たちが日本人赴任者も11月24日に、今まで住んでいたアパートに5カ月

ベトナムでは「テト」と言って新年を旧暦で祝い、1年間で最も長い連休になります。今年は2月1日が旧暦の正月で、1月末から2月初旬にかけてテト休暇になります。ホーチミンでは中心部が歩行者天国となります（写真11・12）。故郷に帰省するベトナム人も多くいますし、親戚や地区の皆さんが集まって一緒に飲食をする機会も多くなります（写真13）。

日本でも年末年始等の帰省により感染が拡大するので連休明けの状況が気になりますが、やはりベトナムでもテト休暇明けから、感染が都市部から地方に広がったようです。オミクロン株への置き換わりも進行し、首都ハノイでは連日感染者数が過去

## 同窓の絆

最高になつているとも聞いています。幸いにも私の勤務先では厳しい規制が功を奏しているのか、テト休み明けも大きな混乱はありませんでした。



写真12：テト期間中の街中は夜も大勢の人で賑わっています（2022年1月）



写真11：テト期間中のホーチミン中心部は花で飾られます（2022年1月）

このようにまだ安心するにはほど遠い状況ですが、感染の収束を願って、ベトナム明専学友会メンバーと集える機会がくることを楽しみに待っています。

（2022年1月14日実施の「めいせん net——ベトナムの今」原稿に加筆しました）

### 《皆様へのお願い》

記事をご覧になったベトナム在住卒業生の方、もしくはベトナム在住卒業生をご存じの方がいらっしゃいましたら、是非左記メールアドレスにご連絡ください。

連絡先（枝廣勤務先）

Email：

tetsushi.edahiro@nidec-sankyoco.jp



写真13：テト期間中のベトナム人の会食イメージ